

大江容子教授送別の辞

青山 幸生

東邦大学医学部麻酔科学講座（大橋）准教授

大江教授は、昭和47年に東邦大学をご卒業後、すぐに東京女子医科大学麻酔科学講座に入局されました。東京女子医科大学麻酔科にて研修を積まれた後、昭和55年東京女子医科大学附属第二病院（現 東京女子医科大学東医療センター）麻酔科講師に昇進され、昭和60年同病院助教授、昭和62年には教授にご就任になりました。その間、恩師の古谷幸雄先生のご指導のもと麻酔科領域における体温管理や心臓麻酔の領域において多くの業績を残されました。

平成8年に母校復帰への期待が高まる中、東邦大学医学部麻酔科学第2講座（現 東邦大学医学部麻酔科学講座（大橋））教授にご就任になりました。当時の麻酔科は人員不足により、手術における麻酔管理が低迷している中、大江教授のご努力により①各科からの麻酔科ローテーション制度を導入して麻酔管理症例数の増加が図られ、②麻酔科業務の原点である手術における周術期の患者管理について、術前診察から始まり術中管理、術後の疼痛管理に至るまで一貫した麻酔管理システムを導入されました。特に周術期管理の一環として麻酔科術前外来を開設され、麻酔科独自のインフォームド・コンセントを用いた医療者—患者間の相互主体的関係を重視した医療（手術を受ける患者に専門スタッフが麻酔に関する説明を懇切丁寧に行い手術に対する不安を取り除き、患者の意思を尊重し、苦痛なく、安心して手術が受けられるシステム）を築かれました。また、③麻酔科医の人数を確保することに積極的に務められ、その結果定期手術はもとより、24時間緊急手術に対応できる体制を整えられ、④麻酔法、使用薬剤の最新のテクニックを導入し患者はもとより、術者にも満足して頂けるように日々努力と向上に力を傾けられ、結果、麻酔科を病院中央部門の重要な地位にまで引き上げられました。また、ペインクリニック部門においては特に慢性疼痛の診断と治療においてご理解とご協力をいただき、現在の円滑な痛み診療の礎を作って頂きました。

大江教授は、日々の臨床のみならず研究と学会活動も休

むことなく続けられました。学会活動としては、日本麻酔科学会代議員、日本手術医学会評議員、日本モニター学会評議員をはじめ多くの学会に所属され活発な学会活動を続けられました。特に平成20年9月には日本麻酔科学会関東甲信越・東京支部第48回同学術集会の大会長を務められ、653名の参加者を迎え、無事成功裏に会を終えられました。また平成24年5月には東京麻酔専門医会総会・会長も務められました。さらに公的活動として、独立行政法人大学評価・学位授与機構大学機関別認証評価委員会専門員、経済産業省産業技術環境局環境生活標準化推進室日本工業標準調査会臨時委員・医療用具技術専門委員会委員、独立行政法人医薬品医療機器総合機構専門委員、独立行政法人日本学術振興会研究事業部科学研究費委員会専門委員など多くの公的役職に携わってこられました。

東邦大学医療センター大橋病院では病院の執行部に入れ、院長補佐、手術部部长、輸血部部长、臨床工学部部长など麻酔業務に関係する部門の長を長年務められ、麻酔科を通じて中央手術部の運営がより効率的に、また安全に行えるように日々務められ、多くの業績を残してこられました。また、病院を通じての公的社会活動の一環として、東京消防庁から依頼を受け、救急救命士への気管挿管実習の指導を長年にわたり続けてこられ、10名以上の救急救命士（気管挿管実施可能な救命士）を育成してこられました。

最後に、この度、大江教授のご退任における退任記念会や退任記念誌の発行に際しましては、学校法人東邦大学、同医学部、同医療センター大森病院、同佐倉病院、また同大橋病院教職員の皆様には多大なご尽力を頂き、誠にありがとうございました。誌面を借りまして、厚く御礼を申し上げます。大江先生からは、名誉教授として、東邦大学人として、これからも東邦大学・東邦大学医療センター大橋病院へのご指導を頂くとともに、今までのご貢献に感謝申し上げます。